

CLIL 理論に基づいた「日本事情」の可能性

— 伝統文化から現代日本を理解する試み —

清水 順 子

(国際教育交流センター)

キーワード

CLIL、内容統合型学習、日本事情、歌舞伎、茶道

要 旨

本稿は、北九州市立大学における CLIL 理論に基づいた「日本事情」の実践報告である。日本語教育における CLIL 実践はまだ始まったばかりであり、言語教師が内容を扱う際に注意すべき点も多い。本実践では、歌舞伎及び茶道を内容として設定した。歌舞伎は日本文化の総合的芸術であり、茶道もまた日本文化の総合的教養とされ、そこに両者の共通点がある。伝統文化から現代日本を理解する視点を得るために、CLIL 理論を用いて授業をデザインした。実践の結果、教員、学生それぞれの側に従来の授業とは異なった新たな学びが生まれ、CLIL の可能性が示された。

1. はじめに

本稿の目的は、北九州市立大学における、留学生特別科目「日本事情（人文）B」（以下、日本事情）の実践を報告することである。日本事情では、2013 年度より、CLIL 理論、つまり、「科目内容 (Content) を目標言語 (Language) で教えることを目標とした内容統合型学習 (池田, 2011)」に基づいた教材 (岩瀬, 2011) を使用した授業実践を行っている (清水他, 2014)。本稿では、実践を始めた 2013 年度から 2015 年度 (執筆段階ではまだ学期途中だが) にかけての、CLIL デザインの見直し、それに伴う実践の変化を記し、今後の実践の可能性を述べる。

2. CLIL とは何か

CLIL (Content and Language Integrated Learning) とは、教科科目などの内容とことばを統合した学習をさす (渡部・池田・和泉 2011)。同じような教育法として、CBI (Content-based Instruction) 「内容中心指導法」があげられるが、CBI が内容 (Content) に重きを置くのに対し、CLIL では、内容 (Content) と言語 (Language) を同じバランスで統合することをめざす。

日本語教育はこれまで、言語の形式にのみ焦点を当て、その内容についてはあまり注意を払われてこなかった。しかし、和泉 (2011) は SLA は観点から、インプットは豊かな、伝えるに足る意味内容があり、目的も状況もはっきりとしたコンテキストが必要だと述べている。つまり、学ぶ意味のある内容を授業で設定することが重要だということである。このように、言語能力は言語だけでは伸びず、必ずしも何かしらの内容を伴うという主張を考えると、CLIL は大変意味のある学習理論だといえる。それを裏付けるかのように、近年英語教育の分野では CLIL が注目されており、小学校や中学校でも CLIL 理論を取り入れた実践が盛んに行われている⁽¹⁾。一方で、日本語教育の分野での実践は、大阪大学文学部 (2011) を初め、岩瀬による一連の報告 (岩瀬 2011, 岩瀬 2012, 岩瀬 2014)、奥野他 (2015) があるが、まだ広く実践が行われている訳ではない。

3. 教養科目としての「日本事情」

北九大における「日本事情」科目は人文 AB と社会 AB があり、学部留学生を主対象とする教養科目である。近年、大学における教養科目は状況が変わりつつある。杉原 (2013) では、非専門教育科目に、一部の初年次教育科目やキャリア教育科目が配置され、教養科目における「役立つ」科目の比重が高くなっていることを指摘し、「就職・就労に役立つ」かどうかという指標だけで教養科目の意義を判断してしまう恐れがあるとしている。筆者自身も日々の授業の中で、学生の側に、そのような「就職や就労に役立つ」ような科目を期待していると感じることがある。しかし、「役に立つ」かどうかが大学の授業において重要なのだろうか疑問がある。また、今はまだ「役に立」たないと感じていることも、将来「役に立つ」ことがあるのではないだろうか。「役立つ」という視点だけで、今後の学習や人間形成を行っていくのは、大学教育の意義に反しているのではないだろうか。杉原 (2013) では、学生が今後、「役立てる」こ

⁽¹⁾ 『英語教育』2013 年 6 月号で特集が組まれている。他に、上智大学での実践を扱った渡部他 (2011) 及び和泉他 (2012) や、笹島 (2011) がある。

とができるような経験や価値観を身に付けることが重要だと述べている。つまり、現在の風潮や学生の興味・関心に安易に引きずられることなく、教養教育を行うべきであろう。

4. 日本語教育における「日本事情」

日本語教育において「日本事情」の科目は、「日本文化」の知識を教授するものから、学習者それぞれに「日本文化」を発見させようとする形に転換がおこなわれている。従来、「日本事情」教育は、「文化」（伝統文化、文学紹介など）に関して、知識伝達型教育であった（長谷川 1999）。そのような中、細川（2000）では、知識伝達で誤解されることが多々あるステレオタイプからの脱却をめざし、自己を確立し、「個と個の文化」の視点を担う教育の重要性を述べている。このような考えは、竹内（2003）で述べている教養養育の役割、「適応」「超越」「自省」と共通する。特に、「自省」が「自らの妥当性や正当性を疑う作用」とされ（竹内、2003）、自己を相対化することができる機能とある。この自己を相対化する視点を持つことが「日本事情」教育として必要であると考えられる。

以上をふまえ、本実践では、日本の伝統文化から、日本社会・日本文化・日本人を理解する視点を得ることをねらいとし、CLIL における内容、具体的な伝統文化を選定することとした。次章では、言語教師が CLIL において内容をどのように扱うかについて述べ、本実践で選定した内容について述べる。

5. 言語教師は CLIL において内容をどう扱うべきか

2 章で述べたように、CLIL では内容と言語のバランスを等しくすることが重要視される。そのため、CLIL 理論に基づく実践においては、言語（Language）と内容（content）両方を教えられる教師が必要である。笹島（2011）では、言葉の教師と科目教師が協力するチームティーチングの体制が重要だとされ、本実践のような内容の非専門家である言語教師が CLIL 実践を行う場合においては言及されていない。言語教師が CLIL を実践する際、言語面での手当てはもちろんできるが、内容については専門家と同じように語れないのが通常である。これが、言語教師の CLIL 実践を難しくしている一つの側面だといえる。実際に、大阪大学文学部（2011）では、それを考慮したコースがデザインが行われ、学部の専門家と日本語教師のチーム・ティーチングにより実践が可能になっている。その実践について報告した青木他（2013）では、日本語教育における CLIL 実践の可能性と限界に言及し、CLIL は日本語教師だけではできないとしている。さらに、日本語教師が CLIL をやりたいと思ったら、デザインの段階から実践

に至るまで、内容の専門家との緊密な連携が必要だとも述べている。

では、CLIL は本当に言語教師だけでは実現不可能なのだろうか。一連の報告を行っている岩瀬（2011, 2012, 2014）をみてみよう。コースデザインを行った岩瀬は日本語教師であるが、同時に歌舞伎への造詣が深く、伝統文化としての歌舞伎を日本語教育に取り入れたいとの思いから、CLIL 理論を方法論として用いている。したがって、岩瀬は内容として歌舞伎を扱うことにある程度専門的な知識があると拝察される。さらに、その歌舞伎に対する熱意が岩瀬の実践の原動力となっていることもうかがいしれた⁽²⁾。このことから、内容に関して非専門家であっても、ある程度の熟達や知識があれば実践できる可能性が示されていると言えるだろう。さらに、大阪大学で実践に加わった小林が、言語教師の CLIL 実践の難しさを痛感しながらも、だからこそチャレンジする価値があるとし、筆者を後押しし、筆者は内容の非専門家であるが CLIL を試みることにした。

6. 2013 年の実践（内容：歌舞伎）

2013 年度は、CLIL 理論に基づいた教材（岩瀬, 2011）を主に使用し、実践を行った（清水, 2014）。岩瀬（2011）が試作した教材は、歌舞伎を主な内容として取り上げている。前述したように、岩瀬は、歌舞伎に対して造詣が深く、その実践は歌舞伎が好きな岩瀬ならではのものだった。一方、筆者は歌舞伎の専門家ではない。しかし、歌舞伎の魅力は大いに感じられるし、岩瀬の教材という心強さもあり、歌舞伎の勉強をしつつ、実践に臨んだ。CLIL 理論と歌舞伎という 2 重の初心者だった筆者の 2013 年度の実践は、清水（2014）にもあるように試行錯誤の連続だった。CLIL 理論を頭では理解したつもりでいても、それをティーチングプランに落としていくことが結びつかず、実際にやってみると、内容（歌舞伎）を説明することになりがちであったように思う。その結果、2013 年度の実践は CLIL の最大の特徴ともいえる内容と言語のバランスが等しく取れず、内容の比重が大きくなっていたことが課題として残された。筆者は日本語教師であり内容の専門家ではないので、内容について十分に語れるはずがないのだが、このような内容中心の授業になってしまったのは、ひとえに筆者の側に原因があった。筆者は内容（歌舞伎）について学ぶ内に歌舞伎の持つ面白さや興味深さに触れ、この素晴らしさをあまさず学生に伝えたい、伝えなければならないという思いを抱くようになった。この思いが結果的に言語の面を薄くしていたのかもしれない。この失敗からは、歌舞伎は CLIL を行

⁽²⁾ 筆者は、2013 年度より岩瀬が試作したコースデザインを用いて実践を行っている。岩瀬と直接会ったりメールでやり取りをする中で、岩瀬の歌舞伎に対する情熱に触れ、それが筆者も歌舞伎に感化されるきっかけとなった。

う上で扱うにふさわしく学ぶに足る内容であることが示唆されたが、歌舞伎から現代日本を理解するためには、さらに他の伝統文化も取り入れたほうがいいのかもかもしれないという思いも抱くようになった。この思いをもとに2014年度のデザインを練り直すこととした。

7. 2014年度の実践（内容：歌舞伎・茶道）

前述の2013年度の課題をふまえて、2014年度は、①言語的な配慮を多くし、言語と内容のバランスを図り、②内容に関しては歌舞伎に加え、茶道を取り入れることとした。以下にその理由を説明する。

①については、CLILの4つのCに従い、教案を見直した。CLILでは、内容（Content）、言語（Communication）、思考（Cognition）、協学（Community）で構成される、4つのCを有機的に統合した点が特徴とされる（渡部他, 2011）。この枠組みに即して教材を作成し、教案を考え、実践を行うことで、よりハイブリッドな教育が実現できるとされるため、教案の指導項目を4つのCをもとに細分化し、認知的な付加が低いものから重いものに配列していった。

次は②歌舞伎に加え茶道を取り入れたことである。茶道は日本文化の総合的教養とされる。なぜなら、茶道は、その歴史（文化、政治）、茶室や庭（建築）、茶事（季節）、茶道具（美術・工芸）、掛け軸（書画）、茶花（生花）、着物（着付け）、食事（懐石）、礼儀作法（立ち居振る舞い）などの要素から成り立っており、それらはいずれも、現代日本を理解する上で欠かせない視点であるからだ。一方の歌舞伎は日本文化の総合芸術といえるだろう。歌舞伎の芸術性と大衆性は現代日本に大きな影響を与えている。茶道、歌舞伎は、現代に残る伝統文化であり、江戸時代にスタイルの確立があった。戦乱のない江戸に日本文化の熟成があったともいえる。茶道も歌舞伎もその変遷の中で様々な伝統や芸術が取り込まれることで、現代に衰退することなく至っている。この伝統文化を継承していく両者の点が共通しており、現代日本を理解する視点となり得ると考えた。次に、両者とも、初心者でも誰でも参加できるものだが、参加する側の教養次第で感じ方、観方が異なるという特徴がある。茶道では、亭主の趣向を如何に共有できるかで感じかたが異なり、歌舞伎では上演される演目に対する知識があるかどうかで観方が異なってくる。自身の持つ教養でコンテクストを共有することは、実に日本らしい感覚だと考える。たとえ、現在学生の興味関心がなくても、茶道と歌舞伎は共に学ぶ意味のあるものであり、授業で扱うことで学生の興味や関心を広げ、成長を促すことができる可能性がある。以上のように両者とも日本を代表する伝統文化であり、CLIL理論において、学ぶ内容として耐えられると判断したため、茶道と歌舞伎の2つを改めて設定した。懸案であった、内容についての専門家との連携は、茶道に関しては、小林とチームティーチングを行った。小林は日本語

教師だが、同時に茶道講師資格保持者であり、茶道を担当するのにふさわしいと考えた。さらに、筆者も 2013 年度より引き続き歌舞伎を担当するにあたり、「松竹歌舞伎検定」の勉強を始めた。次章では、日本事情の授業目標と計画について述べる。

8. 日本事情の授業目標と計画

以上をふまえ、2014 年度及び 2015 年度の日本事情（人文）B の授業目標を、以下に設定した。

- ・ 現代日本人に通ずる伝統文化「茶道」「歌舞伎」を通して、「日本社会・日本文化・日本人とは何か」を考える。
- ・ 文化を理解する視点を持つことで、グローバル化した現代社会の中で、時代に流されない自己の生き方を模索する。

具体的には、日本の伝統芸能である「茶道」や「歌舞伎」を題材として、体験学習を行った。その過程で立ち昇る日本文化について、クラス内で議論を重ねて行った。それらの過程で一人ひとりが、改めてそれぞれの文化を見つめ直し、気づきを得ることをもう一つのねらいとした。以下が授業計画表である。

表 1 日本事情（人文）B の授業計画

第 1 回	オリエンテーション（伝統文化）（現代生活）
第 2 回	茶道（1）茶道の世界をのぞく（茶室）（茶道具）（わびさびの世界）
第 3 回	茶道（2）茶道の世界を体験する（薄茶）（濃茶）（体験する）
第 4 回	茶道（3）茶道から歴史を学ぶ（千利休）（織田信長）（豊臣秀吉）
第 5 回	茶道（4）現代に続く伝統（工芸）（作法）（三千家）（千家十職）
第 6 回	歌舞伎（1）歌舞伎の世界をのぞく（人間国宝）（女形）（衣装）（大道具）
第 7 回	歌舞伎（2）歌舞伎から歴史を学ぶ（徳川幕府）（江戸の町と町民文化）
第 8 回	歌舞伎（3）演じる（竹本・義太夫）（現代に残る名台詞）
第 9 回	歌舞伎（4）歌舞伎を観る（仮名手本忠臣蔵大序・三段目・四段目）
第 10 回	歌舞伎（5）現代のサムライ（切腹）（武士道）
第 11 回	歌舞伎（6）忠臣蔵と現代社会（世界観）（義）
第 12 回	歌舞伎（7）魅力（大衆性）（芸術性）
第 13 回	伝統文化と現代社会（1）日本へ与えた影響（文化の伝承）（サブカルチャー）
第 14 回	伝統文化と現代社会（2）外国へ与えた影響（文化の融合）（新しい文化）
第 15 回	伝統文化を継承するために私たちができること

授業を通して、体験学習を行うためオーセンティックな素材を多数使用した。授業を受講した学生の中には、日本語の古語があまり得意ではない者もいたため、映像資料を追加したり、視覚的・聴覚的に工夫を行った。

9. 実践での気づきと筆者の変化

ここでは、2014 年度及び 2015 年度の実践の内、2015 年度の実践を中心に気づきを述べる⁽³⁾。2013 年は、筆者単独での実践であったが、2014 年から小林も加わったことにより、協働でチームティーチングすることのメリットを感じることができた。1 つの授業を複数の教員で担当することで、学生の普段とは違う様子が筆者を驚かせたと同時に学生の新たな一面を垣間見るきっかけになった。

茶道の回では、お茶室や和室が手配できず通常の教室しか使用できなかったが、机の配置や掛け軸を工夫することでそれなりの空間、茶道の雰囲気が出たと小林が述べている。また、一人として、やりたくなさそうな、興味がなさそうな学生がいなかったことも大きな発見である。実際に本当の茶道具といったオーセンティックな素材を観たり、触ったり、お茶を飲んだりと体験することが多く、学生を退屈させる時間がなかったことも要因だと考えられる。学生はお茶菓子を美味しいと言って愛で、薄茶を美味しいと言って飲んでいた。

歌舞伎については、最初は、歌舞伎について初めてであり、少し知っているけれど全く意味が分からないという学生がほとんどだった。しかし、江戸の文化や演目の意匠に触れることで、歌舞伎の作品の意味を捉えることが容易になり、自分とは関係のない所にある芸術から、人間世界の出来事が描かれている自分とはそう遠くない芸術へと捉えられるようになったことが学生のレポートからうかがえた。

最後に、本実践のように明確に CLIL 理論を用い、徹底的に CLIL の考え方で授業を行ってみると、筆者の側にも、学生の側にも、変化があった。うまく表現できないが、日本語に限定された閉じられた教室で課題に取り組むのではなく、教材を通して、現実世界を感じながら学生に問いかけていく感覚である。学生もまた、リアルな現代日本について身の回りのことを振り返り一緒に考えながら取り組んでいた。青木他（2013）では、CLIL は、教室を人工的に作り出された場ではなく、学生たちが知的に関心の持てる事柄を今学ぶための場に変容させるとし、現実の目的をもったコミュニケーションを作りだすと述べている。筆者はそのような CLIL の可能性を感じ、さらに学生にとってはその学びがこれからの考え方、観方、生き方を

⁽³⁾ 本稿を執筆する段階では、2015 年度の授業が完全に終わった訳ではないので、現在までに分かっていることという限定付きである。

作っていく一助となるだろうと確信した。

10. まとめと今後の課題

本稿では、日本事情における CLIL 実践を報告した。日本語教育における CLIL 実践について概観し、言語教師が内容を扱う際の注意点について触れながら、日本事情の内容として歌舞伎と茶道を扱ったことを述べた。次年度の実践課題としては、さらに新たな内容を盛り込むことが挙げられる。歌舞伎の成り立ちとして、江戸幕府や町人文化を学ぶ学習者の反応を観察している内に、江戸を題材として実践することも現代日本を理解することにつながるのではないかと考えた。最後に、CLIL 理念が象徴する、有機的に統合された高品質な授業をめざすという行為そのものが、日々の授業でルーチン化しがちな教師の力量を高めてくれると信じて、次年度に取り組みたいと考えている。

参考文献

- (1) 青木直子・脇坂真彩子・小林浩明 (2013) 「日本語教育と芸術学のコラボレーション - 大阪大学文学部における CLIL の試み」『第二言語としての日本語の習得研究』第 16 号、pp.91-106.
- (2) 池田真 (2013) 「CLIL の原理と指導法」『英語教育』2013 年 6 月号
- (3) 和泉伸一・池田真・渡部良典 (2012) 『CLIL 内容言語統合型学習第 2 巻実践と応用』上智大学出版
- (4) 岩瀬ありさ (2011) 「歌舞伎と日本語教育 - CLIL 理論に基づいた教材化の視点 -」Open Forum 編集委員会 (2013) 『放送大学大学院教育研究成果報告 [学生論文集]』株式会社フクイン
- (5) 岩瀬ありさ (2012) 「歌舞伎と日本語教育 -CLIL 理論に基づいた教材化の視点 -」ICJLE2012 発表要旨
- (6) 岩瀬ありさ (2014) 「歌舞伎と日本語教育 CLIL 実践報告」ICJLE2014 発表要旨
- (7) 奥野由紀子・小林明子・佐藤礼子・渡部倫子 (2015) 「学習過程を重視した CLIL (Content and Language Integrated Learning) の試み - 日本語教育と大学初年次教育における同一素材を用いた実践 -」『2015 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.25-36.
- (8) 笹島茂編著 (2011) 『CLIL 新しい発想の授業 - 理科や歴史を外国語で教える! ? -』三修社
- (9) 清水順子・岩瀬ありさ・小林浩明 (2014) 「日本事情 (日本語で歌舞伎) の取り組み -CLIL 理論に基づいた教材を使用して -」『2014 年度日本語教育学会実践研究フォーラム予稿集』pp.39-42.
- (10) 杉原正晃 (2013) 「学生との対話、教養と自己実現」『学生と楽しむ大学教育』pp.234-248. ナカニシヤ出版
- (11) 竹内洋 (2003) 『教養主義の没落』中公新書
- (12) 長谷川恒雄 (1999) 「日本事情 - その歴史的背景 -」21 世紀の日本語事情編集委員会編 (2000) 『21 世紀の「日本事情」創刊号』くろしお出版

- (13) 細川英雄 (2000) 「崩壊する「日本事情」- ことばと文化の統合をめざして -」 21 世紀の日本語事情編集委員会編 (2000) 『21 世紀の「日本事情」創刊号』 くろしお出版
- (14) 渡部良典・池田真・和泉伸一 (2011) 『CLIL 内容言語統合型学習第 1 巻原理と方法』 上智大学出版